

「IBD白書2026」を公開

炎症性腸疾患患者の治療や情報ニーズの変遷を明らかに

健康・医療分野のメディア事業ならびにマーケティング事業を行う株式会社QLife（キューライフ／本社：東京都港区、代表取締役：可知健太）は、潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患（IBD）患者さんとそのご家族を対象とした実態調査を行い、その結果を「IBD白書2026」として発表しました。本調査はQLifeが運営するオウンドメディア「IBDプラス」において2018年から2年に1回実施しているもので、5回目となる今回は、「IBDプラス」および「自己免疫疾患プラス」の2メディア共同で実施いたしました。

今回は、治療満足度、通院頻度、日常生活における食事の悩み、患者同士の交流状況に加え、近年注目を集める「医療情報収集における生成AIの活用状況と期待」についても新たに調査を行いました。

調査概要

目的：IBD（炎症性腸疾患）患者の治療や生活についての実態把握

対象者：IBDと診断された患者およびご家族

方法：インターネット調査

期間：2026年6月8日～6月30日

実施：株式会社QLife IBDプラス編集部／自己免疫疾患プラス編集部

回答数：439（うち疾患別解析対象：435）

- ・潰瘍性大腸炎：292人（66.5%、うち患者本人が88.4%）
- ・クローン病：143人（32.6%、うち患者本人が79.0%）
- ・男女比：男性44.9%、女性54.7%

主な調査項目

- ・ IBD患者さんの重症度、治療の状況
- ・ IBD患者さんの日常生活、不安要素、食事に対する意識

- 周囲の理解度
- IBD患者さんの情報収集の仕方、患者さん同士の交流状況
- 医療情報収集における生成AIの活用状況

調査サマリ

【2026年調査の回答者について】

- 患者本人が約85%（男女比は約5：6）
- 約6割が本調査に初めて回答
- 潰瘍性大腸炎 約67%、クローン病 約33%
- 重症度は「寛解」が最も多い
- 約8割が指定難病の医療費助成を受けている

【2026年調査からわかったこと】（一部抜粋）

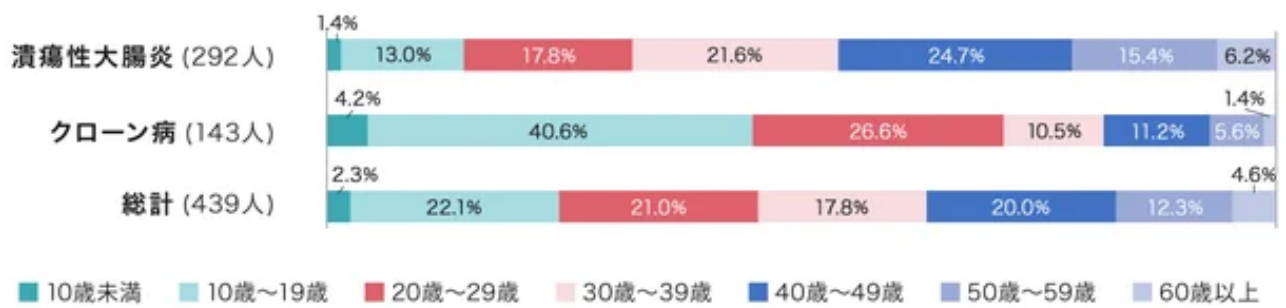
- 使用していると回答した人の割合が最も高い薬剤は、潰瘍性大腸炎は「5-ASA製剤」、クローン病は「生物学的製剤」
- 初めて症状が現れた年代として「50代」と回答した人の割合が2020年の調査から増加傾向
- 診断後の悩みとして「食事制限が辛い」と感じている人の割合は2024年調査より減少

調査結果（一部抜粋）

症状が初めて現れた年代

全体では10代（22.1%）が最多で、次いで20代（21.0%）、40代（20.0%）だった。疾患別では、潰瘍性大腸炎は40代（24.7%）、30代（21.6%）、20代（17.8%）の順、クローン病は10代（40.6%）が最多で、次いで20代（26.6%）、40代（11.2%）となった。

潰瘍性大腸炎は2024年とあまり傾向が変わらなかったが、クローン病は2026年調査では20歳以下の割合が多くなっていった。50代で初めて症状が現れた人の割合は、2020年調査は4.7%、2022年調査は8.4%、2024年調査は10.1%、2026年調査は12.3%と、調査のたびに割合が増えてきていることがわかった。



なお、「IBD白書2026」全文・集計結果の詳細に関しましては、下記「自己免疫疾患プラス」記事をご覧ください。

▼「IBD白書2026」がついに完成！IBD患者さんの治療・日常生活の実態は？

<https://autoimmune qlife.jp/news/20260901-j098/>

【本件に関するお問い合わせ先】

株式会社QLife

<https://www.qlife.co.jp/inquiry>

会社名：株式会社QLife

所在地：東京都港区虎ノ門3-8-21 虎ノ門33森ビル10階

代表者：可知 健太

事業内容：医療・ヘルスケア領域における情報提供サービス等

↓ d347-385-11c6e0a3a411379dade9b52dc603a27e.pdf

QLifeのプレスリリース一覧

https://prtimes.jp/main/html/searchrlp/company_id/347

【本件に関する報道関係者からのお問合せ先】

株式会社QLife 自己免疫疾患プラス

<https://www.qlife.co.jp/inquiry>